

連 載
講 座

クローズアップ“火災“(23)

—消防統計からのアプローチ—
都市の防火性能はどこまで向上したか?(3)

財団法人消防科学総合センター
調査研究課長 日野 宗門

前回に引続き、防火地域・準防火地域の効果等を見ていくこととし、今回は建物火災1件当たりの焼損面積と焼損棟数をもとに考察50してみよう。

1. はじめに

建物火災1件当たりの焼損面積は、防火地域で最も少なく、次いで準防火地域、その他の地域となっており、その他の地域の値は防火地域の約3倍となっている。また、防火地域、準防火地域では緩やかではあるが減少傾向がみられるのに対し、その他の地域ではほとんど横這い状況にある(図1)。

建物火災1件当たりの焼損棟数についても、防火地域と準防火地域での減少、その他の地域での横這いといった傾向は上述の焼損面積の場合と同様である(図2)。(ただし、その他の地域の焼損棟数が準防火地域のそれを下回っている点は異なっている。)

以上のように、防火地域、準防火地域では建物火災1件当たりの焼損面積・焼損棟数は減少傾向を示すが、その理由を次に考えてみよう。

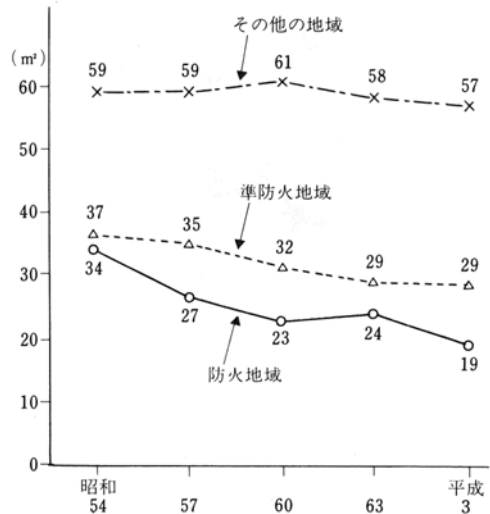


図1 防火地域、準防火地域、その他の地域での建物火災1件当たりの焼損面積の推移

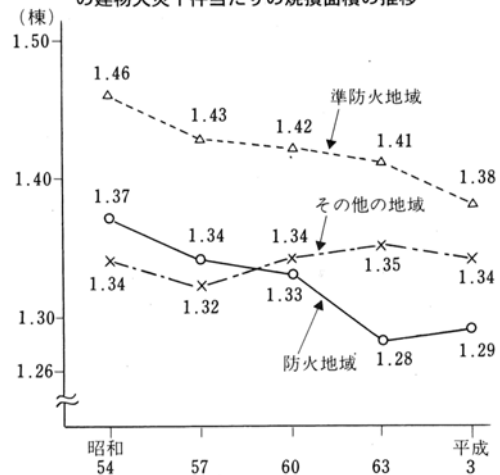


図2 防火地域、準防火地域、その他の地域での建物火災1件当たりの焼損棟数の推移

2. 防火地域における建物構造別の火災の傾向

防火地域では、建物火災1件当たりの焼損面積、焼損棟数とも出火建物の構造が木造、防火造、簡易耐火造、耐火造の順で小さくなる(図3, 図4)。

木造火災1件当たりの焼損面積、焼損棟数は、横這いまたはやや増加傾向にあり、その値は他の建物構造の火災に比し大きなものとなっている。このことは、防火地域内の木造密集地域の存在とその密集度の高さを示していると考えられる。

一方、防火造、簡易耐火造、耐火造の火災1件当たりの焼損面積及び焼損棟数は減少傾向あるいは横這い傾向が認められる(ただし、大きな火災のあった昭和63年の簡易耐火造の焼損面積はたまたま高い値を示している)。なかでも耐火造の火災1件当たりの焼損面積は近年では5㎡前後、焼損棟数は1.02前後と極めて小さな値で推移していることは注目される。

ところで、前回述べたように、防火地域内では木造及び防火造建物の火災件数は減少、耐火造の火災件数は増加(これは防火地域内での木造及び防火造建物の減少、耐火造建物の増加に比例するものと考えられる)しており、その結果、1で述べたような防火地域内での火災1件当たりの焼損面積、焼損棟数の減少となって表れているといえる。

3. 準防火地域における建物構造別の火災の傾向

準防火地域では、火災1件当たりの焼損面積は木造、簡易耐火造、防火造、耐火造の順で、焼損棟数は木造、防火造、簡易耐火造、

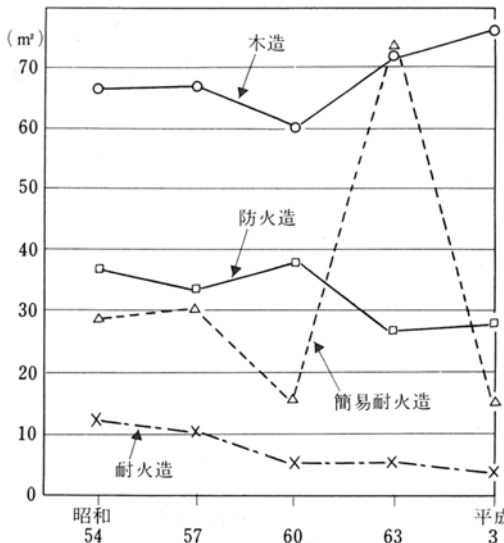


図3 防火地域での構造別建物火災1件当たりの焼損面積の推移
(注)「その他」の構造は件数少数のため省略した。

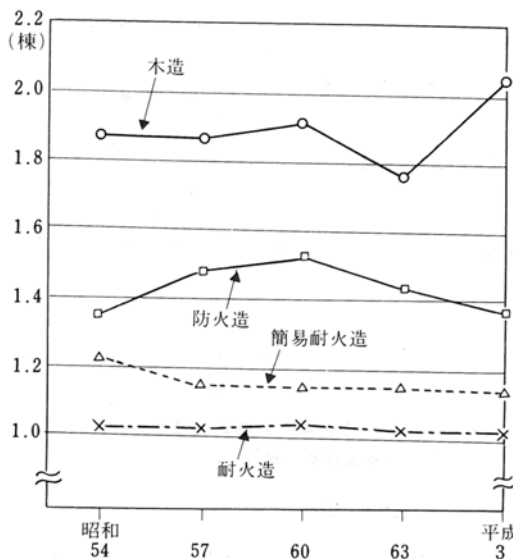


図4 防火地域での構造別建物火災1件当たりの焼損棟数の推移
(注)「その他」の構造は件数少数のため省略した。

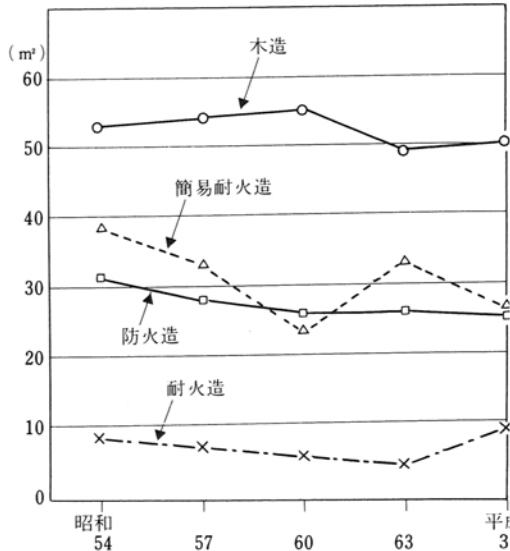


図5 準防火地域での構造別建物火災1件当たりの焼損面積の推移

(注)「その他」の構造は件数少数のため省略した。

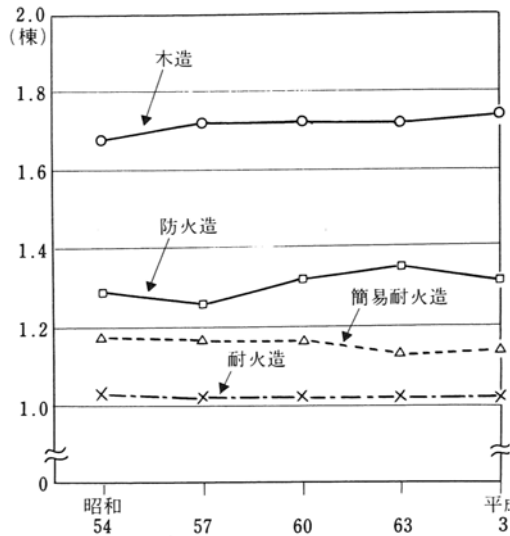


図6 準防火地域での構造別建物火災1件当たりの焼損棟数の推移

(注)「その他」の構造は件数少数のため省略した。

耐火造の順で小さくなっている。この場合、防火地域に比し、木造、防火造の値は小さく、簡易耐火造、耐火造の値はほぼ同程度とな

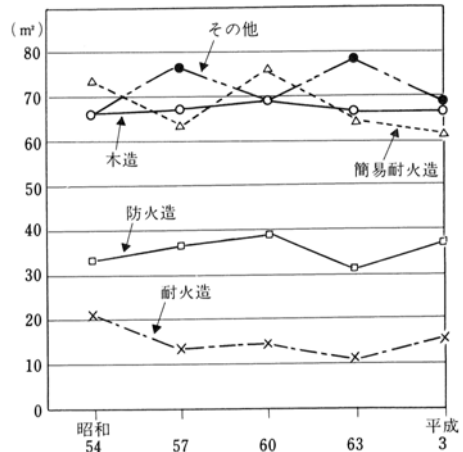


図7 その他の地域での構造別建物火災1件当たりの焼損面積の推移

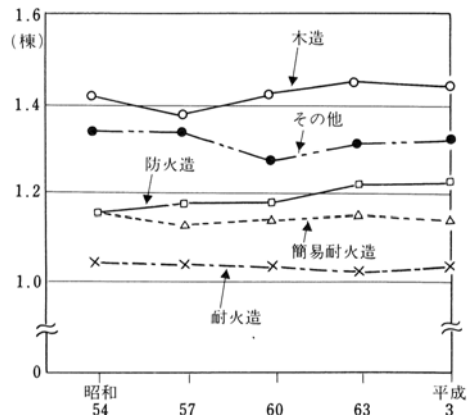


図8 その他の地域での構造別建物火災1件当たりの焼損棟数の推移

っている(図5, 図6)。

また、その推移をみると火災1件当たりの焼損面積、焼損棟数とも建物構造を問わず横這い傾向がみられる。

なお、準防火地域でも、前回紹介したよう

に木造の減少と耐火造の増加傾向にあり、それが準防火地域での建物火災 1 件当たりの焼損面積、焼損棟数の減少に結びついているといえる。

4. その他の地域における建物構造別の火災の傾向

その他の地域では、防火地域、準防火地域に比し火災 1 件当たりの焼損面積は簡易耐火造、耐火造でやや大きくなる傾向がみられる。これは、その他の地域では防火地域、準防火地域に比し相対的に消防力の弱いことが一つの理由と考えられる。また、焼損棟数は防火地域、準防火地域に比し、木造、耐火造で小さくなる傾向にあるが、これはその他の地域では建物密集度が低いことが影響していると考えられる(図7, 図8)。

なお、前回で述べたようにその他の地域では耐火造の増加及び木造や耐火造の減少がみられるものの、火災件数では圧倒的に木造からのものが多いことやその他構造か

らの火災が増加していることなどから、全体としては1で述べたように火災 1 件当たりの焼損面積、焼損棟数とも横這い状況を示すものと考えられる。

さて、昭和 62 年の夏季号から連載を開始した本講座も今回をもって終了することとなりました。拙い内容にもかかわらず長期間にわたりお付き合いいただいた読者の皆様に感謝いたします。連載ではほとんど毎回、電算機を使ってデータを新規に作成するという苦労がありましたが、その分「生きのいい」データを示しえたと自負しております。今後も機会をみつけては、新鮮でおいしい「消防統計データ」を皆様に提供し続けたいと考えております。

なお、次回からは、地域防災行政を効果的・実戦的に進めるためのポイントについて皆様と一緒に考えていく連載講座「地域防災の実戦ノウハウ(仮称)」を開講する予定です。ご期待ください。